

愛知県大府市
ハンヤ古窯発掘調査報告

昭和54年

大府市教育委員会

愛知県大府市
ハンヤ古窯発掘調査報告

昭和54年

大府市教育委員会

序

知多半島は古窯址の宝庫であります。

大府市は知多半島古窯群の北限に位置し、市内各所に古窯が点在しています。

近年、名古屋市の隣接地という環境から宅地造成、道路建設等の地域開発が盛んに行われ、こうした貴重な文化財が破壊される恐れが出てきました。市では斯界の有識者を中心とした文化財保護委員等によって現状保存に一層の努力をしているところであります。

昭和44年吉田第1号古窯、昭和47年惣作遺跡、昭和50年吉田第2号古窯、昭和50年野々宮古窯等を発掘調査を完了し、それぞれ報告書を作成してその成果を発表しました。

ハンヤ古窯は、吉田地区在住の元文化財保護委員で埋蔵文化財について造詣の深かった故坂野好文氏がハンヤ地区48番地内から壺類、山茶碗類を採集し、付近に古窯址があるのではないかと通報があり、それで知りました。教育委員会では、さっそく日本考古学協会員の加藤岩蔵氏に調査を依頼し今回のハンヤ古窯の発掘調査となったものです。

本文の執筆には、調査主任の加藤岩蔵氏に依頼しました。そして、ここに至るまでには、次の例言に掲げた方々の炎暑にもかかわらず、献身的な努力と土地所有者及び関係者の深いご理解がありました。ここに改めてお礼を申し上げます。

おわりに、今回の発掘には、連日大勢の市民の見学者があり、祖先の生活の一端をしのぶとともに市民の文化財への認識が深まったのではないかと思います。これを機会に、さらに文化財の意義と保護の啓発に一層の努力をしたいと思えます。

昭和54年10月

大府市教育委員会

教育長 清水 勝

例 言

1. 本書は、愛知県大府市吉田町ハンヤ48番地17に所在する窯跡の発掘調査報告である。
2. 調査は、大府市教育委員会が主体者となり、日本考古学協会員・加藤岩蔵が担当者として実施した。
3. 本書の執筆は、加藤岩蔵、磯部幸男（日本考古学協会員）、山下勝年（日本考古学協会員）が担当した。
4. 発掘作業は、大府市建設業組合より派遣された人夫が担当したが、次の方々の協力も得た（敬称略）。
 - ・大府市文化財保護委員——坂野好文、竹内長三、田中雅道
 - ・大府市教育委員会——齋藤昌彦、八谷良二、榊田伸彦、漸井五一、高場要、三浦克仁、伊藤邦英
 - ・日本大学学生 小川一平

目 次

第1章 位置と地形	1
第2章 調査の経過	2
第3章 遺 構	4
第4章 遺 物	6
第5章 後 論	12

挿 図 目 次

第1図 ハンヤ古窯位置図	1
第2図 ハンヤ古窯付近の地形図	2
第3図 ハンヤ古窯付近採集品	3
第4図 ハンヤ古窯の窯構造	5
第5図 ハンヤ古窯出土の山茶碗	8
第6図 ハンヤ古窯出土の山茶碗・山皿	9

図 版 目 次

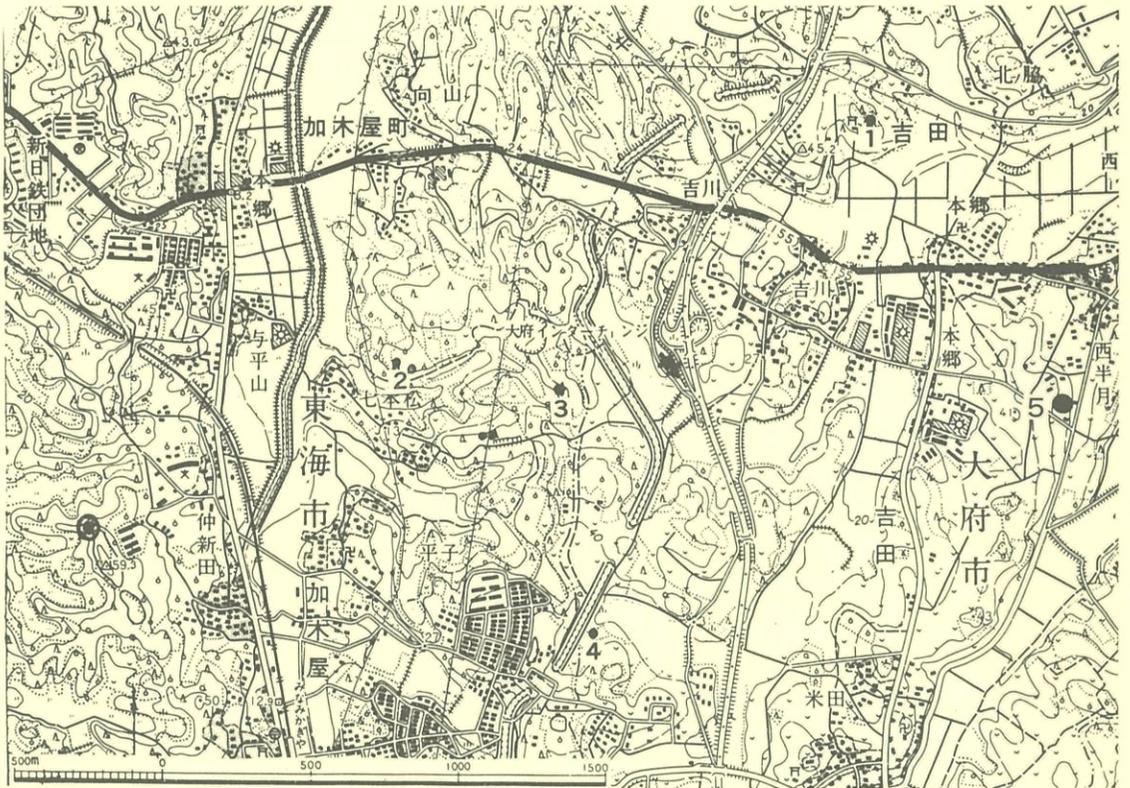
図版第一 (1)	ハンヤ古窯の遠望
(2)	ハンヤ古窯の全景
図版第二 (1)	ハンヤ古窯の焼成室北側の壁
(2)	分焰柱付近の遺物出土状況
図版第三 (1)	山茶碗
(2)	山皿

第1章 位置と地形

大府市は知多半島の基部に位置し、名古屋市と接している。そして、市域の中央部には、断層線が南北に走り、丘陵を東西に二分している。断層が形成した中央低地には、鞍流瀬川が南流し、西丘陵に源をもつ石ヶ瀬川と合流して、衣ヶ浦湾にそそいでいる。この鞍流瀬川に並行して東海道本線が通り、大府駅も低地にある。

ハンヤ古窯は、石ヶ瀬川に面する丘陵の東斜面に築かれている。所属する地籍は大府市吉田町ハンヤ48番地の17で、現在は畑として耕作されている。

位置は、名古屋環状線である国道155号線が知多半島を横断して、大府市と東海市を走る中間点・吉川部落の南方約500mのところにあたる。また、目標物を中心にすると、大府市立吉田小学校の南方約250m、知多半島道路大府インターチェンジの東方約250mに位置し



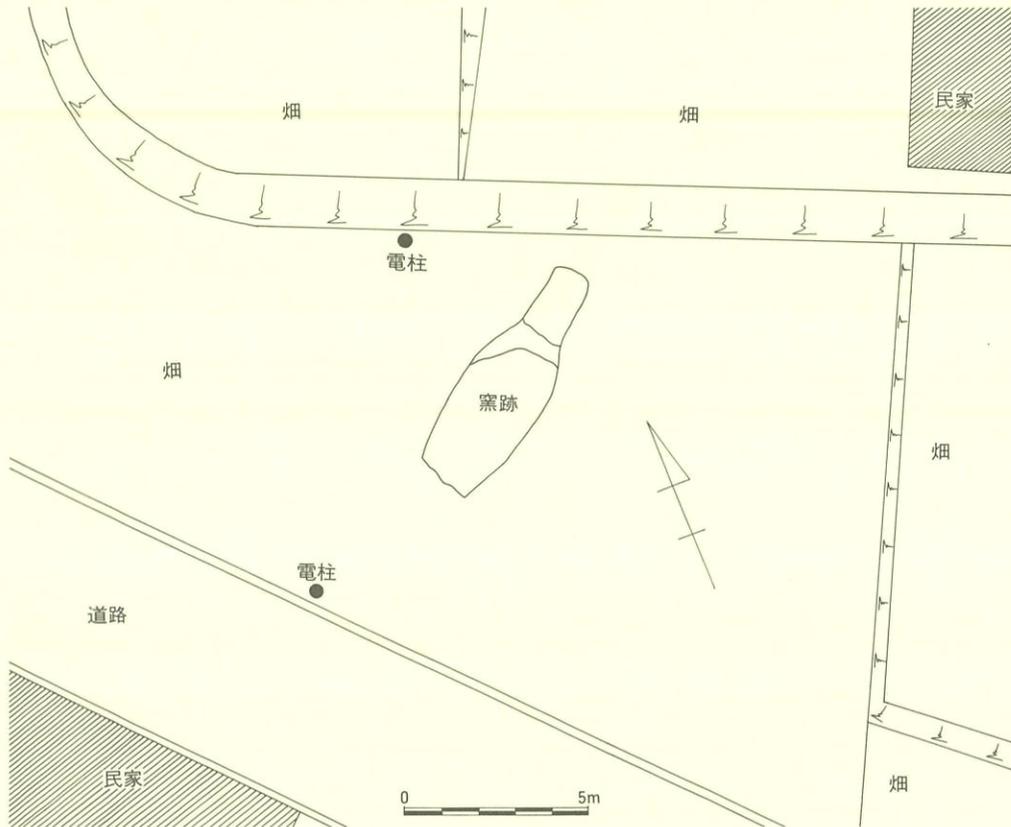
第1図 ハンヤ古窯位置図

1. 野々宮古窯 2. 定納1号窯 3. 権現山古窯 4. 論田古窯 5. ハンヤ古窯
×印 吉田第1・第2号窯 ●印 社山古窯

ている。

この窯の付近一帯は、農地造成のために削り取られ、原形をとどめていない。とくに、ハンヤ古窯付近は高さ約1mの段をなして、上の畑と下の畑に分かれている。そして、下の畑の表面には、かく乱された灰層が広がり、遺物が地表に散在している。上段の畑も、下段の畑も、ともに土質は砂壤土である。

(加藤)



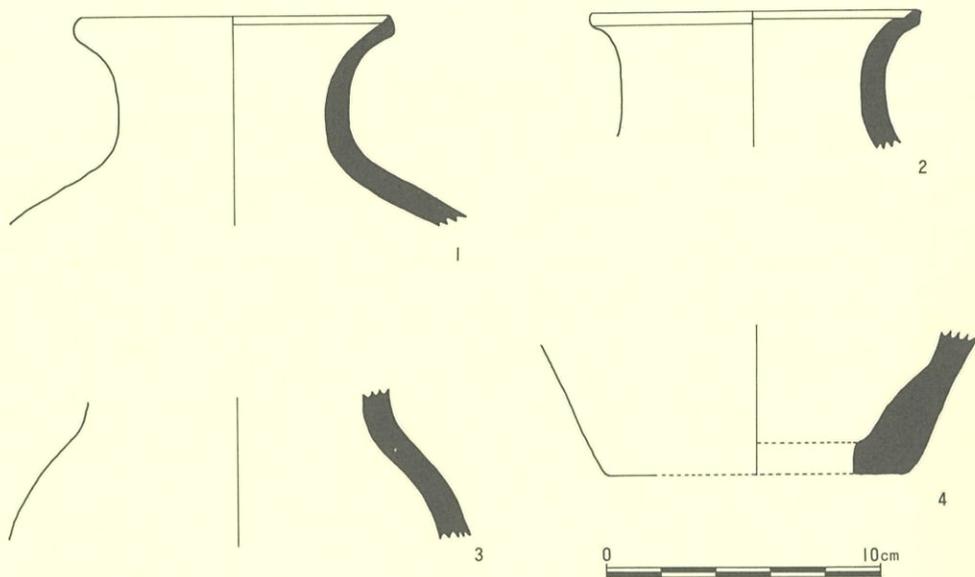
第2図 ハンヤ古窯付近の地形図

第2章 調査の経過

現在、確認されている大府市内の窯跡は、東西の丘陵の斜面に築かれている。行政的には、吉田町と北崎町内に集中している。

今回の発掘の動機は、吉田町に在住しておられた坂野好文氏が、吉田町ハンヤ地内で採集された遺物(第3図)を、大府市教育委員会に持参されたことにはじまる。

さっそく市教育委員会文化財担当者と現地踏査を行った。現地は、開墾された畑が高さ約



第3図 ハンヤ古窯付近採集品

1 mの段によって、上下2枚の畑に分かれていた。下の畑の一部には黒褐色有機土が広がっており、この範囲の表面には、行基焼や焼台が散在していた。段の断面には、灰層が露出していて、窯体が上の畑に存在していることを思わせた。

昭和52年1月20日、社会教育課の主事たちと、窯体の存在を確認するために試掘を行った。上の畑のほぼ中央に、段の稜線に並行して、幅2 m、長さ8 mのトレンチを入れた。地表より約1 mの深さで、窯の両壁の上端が現れ、窯体の存在が確認された。そこで後日の調査のために発掘図を作製し、目標物を置いて埋めもどしをした。

8月19日午前9時30分、調査員たちは現地に集合した。まず試掘地点を中心に幅1 m 30 cm、長さ4 mのトレンチを3本入れて、発掘作業にかかった。発掘開始後、約1時間で、中間の第2トレンチにおいて、窯の両壁の上端が現れた。さらに第3トレンチでは、窯の床面らしい焼土面が現れた。作業は、この焼土面と第2トレンチの両壁にそってすすめた。午前中には焼成室の上半部が確認できた。

午後は第2トレンチから焚き口に向かって作業をすすめた。

翌20日は窯内の発掘調査に主力をおいて作業をすすめた。午前中に山茶碗・山皿等が分焰柱周辺に多量に存在することが判明し、午後は燃焼室の範囲を明確にした。

第3日目の21日は、燃焼室の発掘に主力をおいた。とくに、磯部幸男、山下勝年両氏の参加もあり、発掘は急速に進んだ。午前中で完全に発掘作業は完了し、午後は、磯部・山下氏

を中心に窯の実測図の作製に力をそそぎ、他の調査員は遺物の整理を行った。午後3時30分には、すべて調査が終了し、発掘区の埋めもどしを行った。午後5時には全作業が完了した。

第3章 遺 構

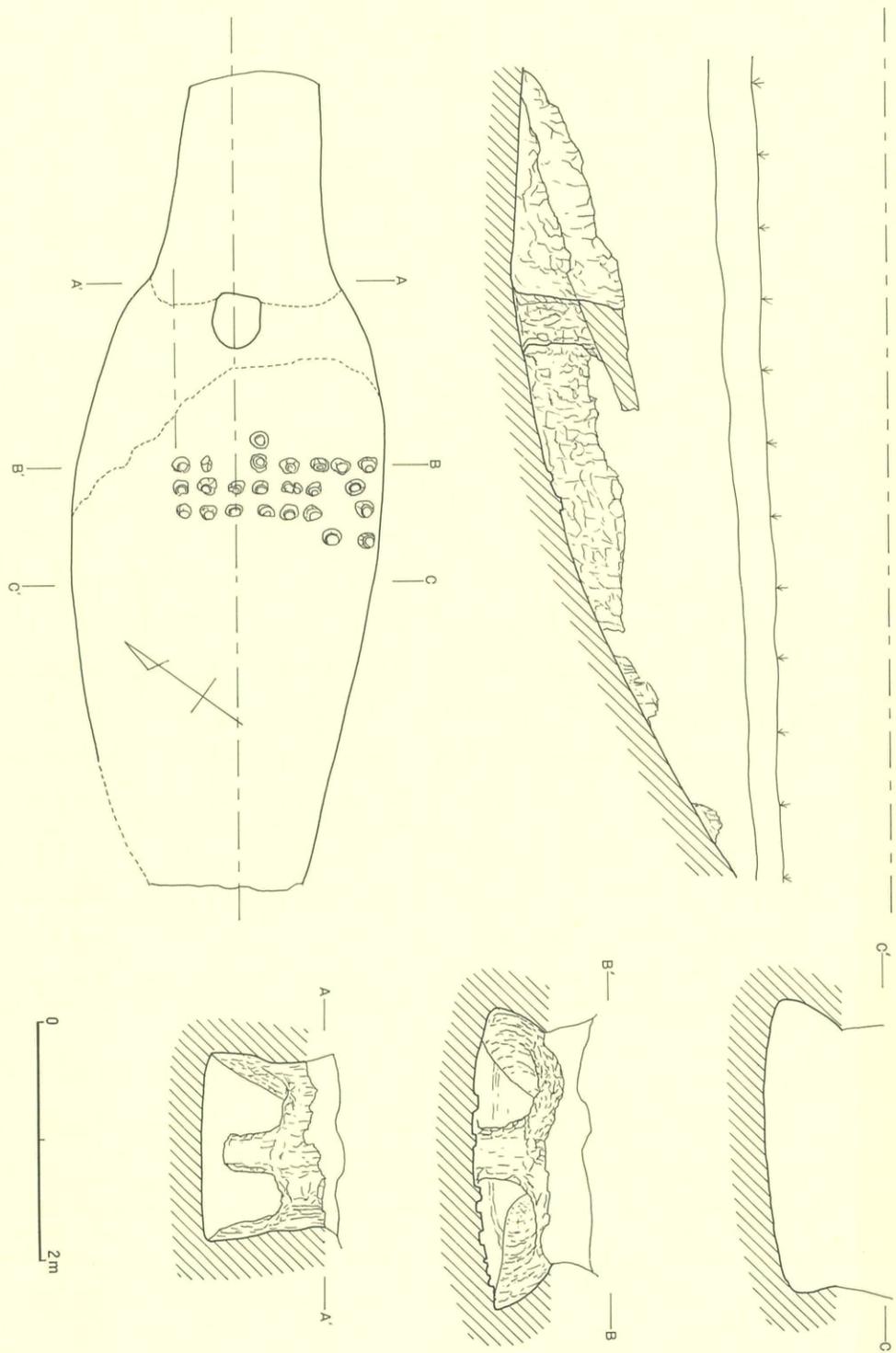
ハンヤ古窯は丘陵の東斜面を利用し、窯の中軸線をほぼ北東から南西へ向けてとり、焚口を北東に開口するように築窯されていた。窯は焼成室後部から煙道、煙出しの部分を欠いているが、焚口から燃焼室、焼成室中央へかけて約6.8mにわたって遺存し、その床面と側壁、ことに分焰柱付近の施設は良好な状態で残っていた。

窯の平面形は、細身の燃焼室が分焰柱をさかいに急角度をもって開き、焼成室前部で最大床幅をとったあと煙出しへ向けて徐々にしまる形をなしている。そして床面傾斜は、焚口からわずかではあるが窯内へ向けて下り傾斜となり、分焰柱へさしかかるところで転換し直ちに焼成室へ向けてのぼりはじめる。分焰柱の基部では8度、分焰柱から1m入った焼成室前部では18度、さらに2m入った後部では34度となっている。床幅が2.5mをこし、最大床幅が2.6mとなる焼成室前部から中央部へかかるあたりに第2の転換点があり、後部煙道へ向けて角度を増してのぼる床面傾斜となっている。

燃焼室 燃焼室は焚口から焼成室との境界をなす分焰柱の前面までで、長さは1.8mである。焚口の幅は1.1mで焼成室へ向けて筒状に入るが分焰柱の手前では幅が1.7mとなる。その床面積はおよそ2.2㎡である。焚口から分焰柱へ向けて下り傾斜となる燃焼室の縦断面に対して横断面を見ると、焚口付近の床面は平坦をなし、それに続く両側壁はほぼ垂直に立ち上がっている。しかし、焚口から1.7m入った燃焼室後部にとったAA'では、床面が両側へ向けてわずかではあるが上がり、側壁も垂直に立ち上がったあと内湾し胴張りが見られるようになる。

なお両側壁はさらに天井へ向けて立ち上がり、良好な状態で遺存した西側壁の奥では床面から高さが1mとなっている。この側壁は上部の焼壁は幅40～50cmで分焰孔上を分焰柱上部へと続く、これが燃焼室の奥壁であり、そのままこの位置での燃焼室の天井の高さを示している。側壁は焚口へ向けて下がっているが、破損がひどく燃焼室の立体的な構造の全体を詳らかにすることはできなかった。

焼成室 分焰柱の後部から約4.1mにわたって残存していた。この先は残存部の平面形からみて、あとわずかで煙道に至るものと思われ、焼成室のほとんどが遺存しているということが出来る。焼成室は、燃焼室から両側壁がラップ状に開き、分焰柱の中心から70cm入った



第4図 ハンヤ古窯の窯構造

あたり、焼成室前部で2.4 m、さらに1 m入った中央部へかかるところが最大値をとり2.6 mとなる。あとは1 mごとに2.3 m、1.9 m、1.2 mと後部へかけて徐々にしぼる形となっている。この窯の焼成室の床面積はおよそ10m²である。

床面傾斜は、最大床幅が2.6 mをとる分焰柱から1.7 m入ったところが転換点となり、焼成室前部は10度～20度、後部は20度～35度となっている。窯の横断面をみると、前部のBB'では両側壁へ向けてわずかにあがる床面に、倒れ込むようにきつく内湾する側壁がつづき、この位置での天井の高さが中央で80cm前後と推定される偏平な断面をなしている。中央部から後部へかけては、床面が荒れ、西壁も崩されていたが、胴張りのみられる床面に倒れ込むように内湾した側壁はBB'の横断面とほぼ形状を同じくするものであった。

床面がことによく遺存した焼成室前部には5段、24個の焼台が床について残っていた。長径が15～18cmの馬爪形焼台で、焼台の上面にできたくぼみから、すべて山茶碗用のものであった。その遺存状態から1 m²にして、5段、1列に5個、計25個程度と推定される。

なお、焼成室中央の床面には、側壁にそって厚く粘土をはった補修のあとがみられた。

分焰柱付近 分焰柱の付近は、分焰柱の上部から両側壁へかけて0.6～1.5 mの幅で天井が残存し、遺構をよく残していた。燃焼室と焼成室の境界をなす分焰柱は、基部でその平面形をみると、燃焼室側は直線的に面を作るように切りおろされ、焼成室側は丸くなるように仕上げられている。横40cm、縦45cmである。上部は両側壁との間にドーム状の通焰孔を作り太くなっている。通焰孔は左右で幅が違い向かって左が65cm、右は75cmとなっている。高さはいずれも入口で50cm前後、焼成室への出口では60cmを測る。分焰柱の上部から焼成室へかけて遺存した天井で、床面から天井までの高さをみると、分焰柱が50cm入った焼成室前部では70cmとなる。通焰孔の入口から50cm、60cm、70cmと高くなってきた天井は、中央部へかかるあたりで90cm近くとなり最高値をとるようである。

燃焼室から通焰孔、焼成室前部へかけて床面には、山茶碗や山皿が重なるように残されていた。これらの遺物を取り出し精査したが、通焰孔付近には間仕切障壁そのほかの施設は検出されなかった。

(磯 部)

第4章 遺 物

ハンヤ古窯は、山茶碗・山皿を専用に焼成したいわゆる茶碗窯である。焚口以下は耕作地となっている関係上、灰原の調査はできなかったが、窯内から良好な資料が多量に出土した。特に、通焰孔から焼成室にかけては、重ね焼きされたものを集積し、そのまま放置した状態

で、おびただしい量の資料が検出されている。この窯における最後の焼成の後、窯を放棄するという条件のもとに、ずさんな窯内清掃と製品搬出がなされたものであろうか。あるいは製品搬出の際の何らかの事故をすら想定させるほどの出土状況であった。

出土した製品は、山茶碗と山皿のみであり、完形の資料約 100 点の中から選び図示した。

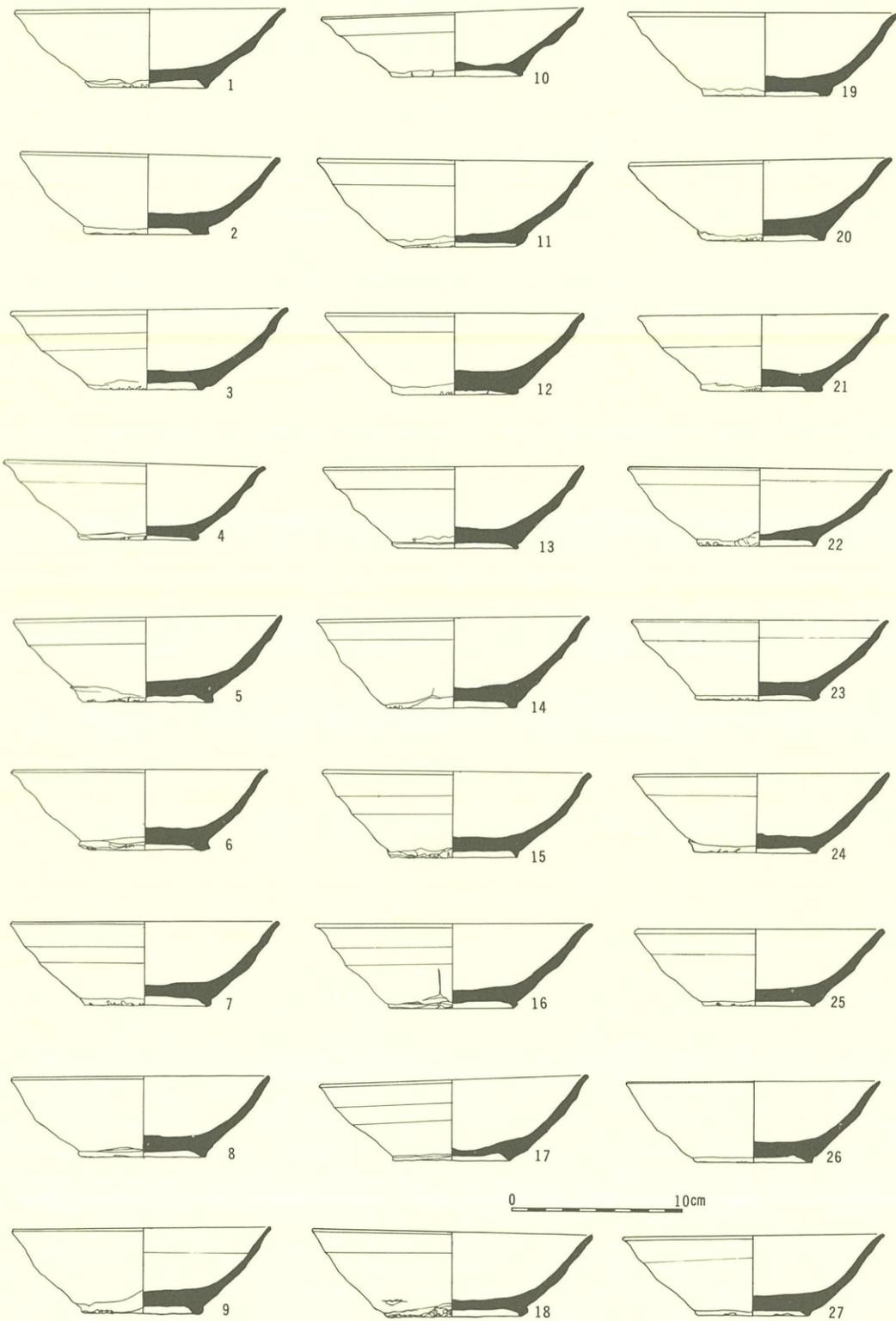
山茶碗（第 5 図の 1～27、第 6 図の 28～39） 口径に比較して器高がやや低く、胴部に優美な張りを残すものが多い。胴部の整形は比較的たんねんである。器壁は概して薄手であり、底部も胴部とほとんど同様の薄さに作るものと、底部を厚くつくるものがある。高台は、胴部に比べてやや粗雑に仕上げられており、断面が三角形をなす高台が、部分的に押しつぶされたものが多い。ほとんどすべての例に靱穀圧痕が認められる。胎土は砂を多く混入したものをういているが、焼きあがりの表面はざらついた感じではなく、なめらかな印象を受ける。全体に黄褐色を基本とした色調を呈するものが多い。酸素の供給も多く受けたいわゆる酸化焰で焼成された事を物語るものである。

知多古窯にあっては、山茶碗の焼成は還元焰でなされ、灰色を基本とする色調を呈するものが主体をなすことから、当古窯出土の資料の多くに酸化焰を受けたものを検出した事は特異な特徴であるといえる。こうした焼成時の事情から、個々の製品についてみると、内外面共に色調が微妙に異なっており、十分に鑑賞に耐え得る味を有するものである。質・量共に優れた資料が得られた事は、この度の調査の大きな収穫の一つであるといつて良いであろう。

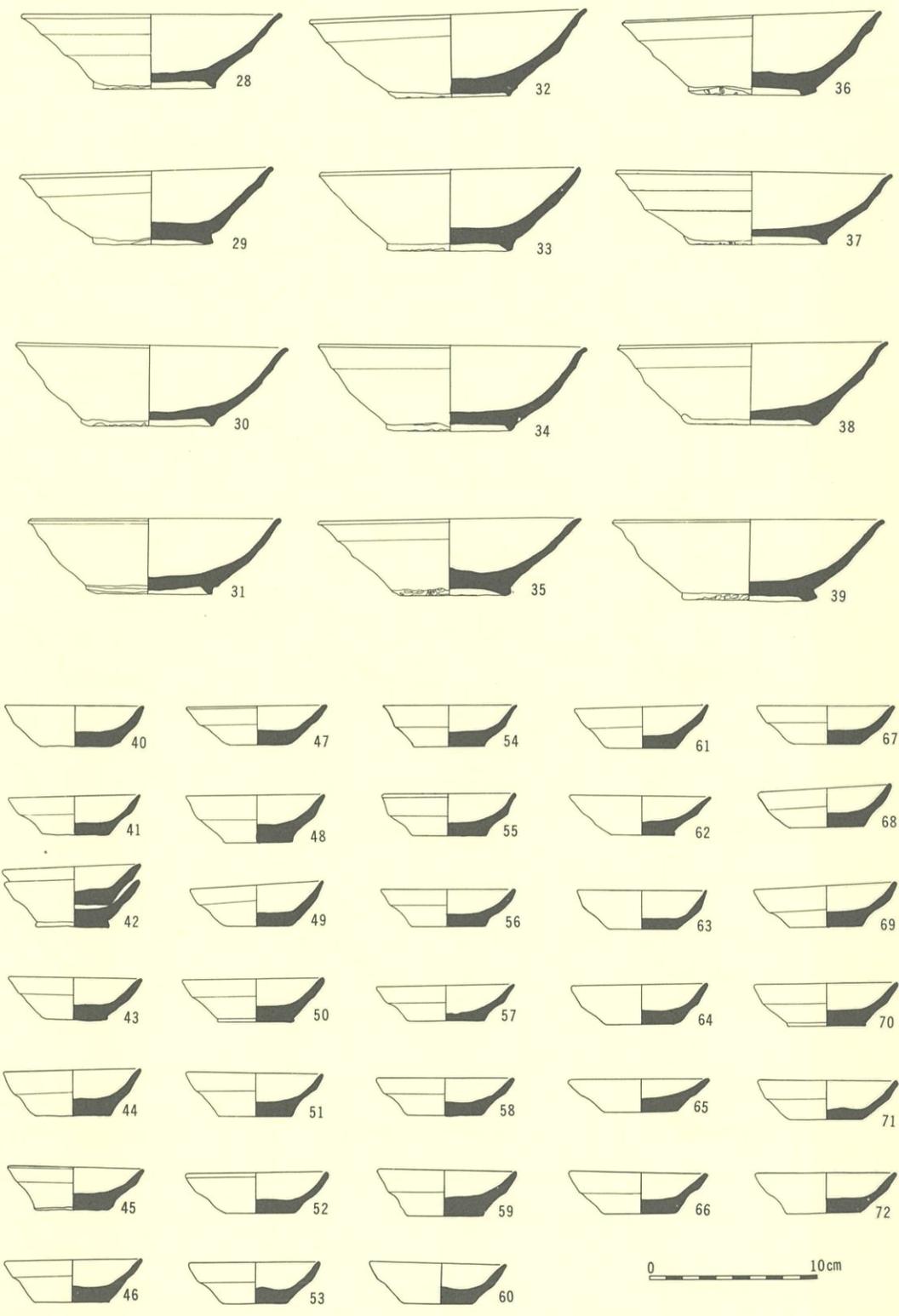
山皿（第 6 図の 40～60） 山皿は口径 8.3 cm 内外、器高 2.6 cm 内外のものが主体をなす。器形は坏形をなし、胴部に比べて底部の器壁を厚くつくるものが多い。中には底部に粘土を貼り加えて厚さを増したと見なされるものもあり、側面から観察すると高台と見まちがうごとくに仕上げている。しかし高台を付した例は無い。口縁から 1 cm ほど下方の位置に段をつくるのが、この工人の癖であろう。胎土・焼成等の特徴は山茶碗と同様である。

蛇足ながら当時の生活跡等から出土する山茶碗・山皿は、今日の見方からすれば、むしろ甘い焼成のものが多い。日常の汁器であってみれば、緑や青の自然釉が流れ落ちたごときものは、製品としての価値の薄いものであった事は想像に難しくない。ハンヤ古窯から出土した山茶碗は、うっすらと釉のかかった例はあっても、自然釉が溶解して流れたような強い火熱を受けた例は見出せなかった。この窯における最後の焼成はおおむね成功したはずである。なぜにおびただしい量の製品が窯内に放置されたのであろう。再び出土状況についての疑念が生ずるゆえんである。

（山 下）



第5図 ハンヤ古窯出土の山茶碗



第6図 ハンヤ古窯出土の山茶碗・山皿

表1. ハンヤ古窯出土の山茶碗数値表 (単位 mm)

挿図番号	口 径	底部径	器 高	備 考
1	161	70	48	高台は粗雑な成形で形が一定していない。
2	155	75	50	高台に細長い葉の痕がある。
3	165	65	50	高台は押しつぶされた感じ。
4	156	78	48	高台の形が一定していない。
5	160	79	53	高台の一部に付け足した跡がある。
6	153	70	49	内面に繊維をなでつけた跡がある。歪みがある。
7	160	73	51	所々に破孔がある。
8	154	74	49	歪みがある。
9	154	68	53	内面にへらで成形した形がある。
10	157	77	41	底部を薄くつくっている。実測例中、器高が最小である。
11	164	68	54	器内底部になでて成形した跡がある。
12	154	66	49	高台の内面にへらで成形した跡がある。
13	155	70	50	歪みがある。
14	162	77	55	高台の内面をなでて成形し、糸切りの跡も消している。
15	160	75	52	
16	165	74	51	器面に亀裂がある。
17	160	69	52	器内底部をけずっている。高台の形は一定していない。
18	165	80	53	器面に亀裂がある。
19	161	74	50	
20	156	71	50	器内底部をなでて成形している。
21	149	72	47	胴部と高台の境に5cmほどの亀裂がある。糸切りは右回り。
22	158	69	47	器内底部をへらでけずり凹めている。
23	153	71	59	高台は押しつぶされている。最大の器高である。
24	153	72	49	下胴部に15mm×4mmほどの小石があり、付近がひび割れている。
25	148	65	47	底部をへらでたんねんに仕上げている。口径が最も小さい。
26	151	70	49	高台の仕上げがたんねんである。
27	156	66	49	高台の一部が押しつぶされている。
28	157	74	46	全体に薄くつくっている。
29	152	70	48	
30	164	76	50	内外面ともに黒いしみが付着している。薄くたんねんに仕上げている。
31	152	69	47	内面に赤褐色・黄褐色の釉がかかっている。

32	167	69	53	内外面に点々と黒いしみが付着している。口径が最も大きい。
33	157	72	51	高台の内側をたんねんに仕上げている。5mmほどの小石が多い。
34	162	76	53	最も良く形が整った例である。胎土は砂が多い。
35	159	66	47	器内底部に盛り上がりがある。
36	154	65	52	内面が銀色の光沢を持つ。
37	165	80	45	口径の割には器高が低い。薄くたんねんな仕上げをしている。
38	161	76	52	口縁に小石を含む。
39	162	74	50	

表2. ハンヤ古窯出土の山皿数値表 (単位 mm)

挿図番号	口径	底部径	器高	備考
40	84	41	25	焼成が甘くもろい。
41	80	40	25	
42	83	44	(37)	底部が特に厚い。
43	81	37	26	もろい感じ。
44	83	45	28	
45	82	43	27	
46	83	44	27	
47	85	36	25	
48	84	40	29	底部が特に厚い。器高が最も高い。
49	81	41	27	
50	86	43	27	底部が外方にはみ出す。
51	83	44	27	
52	86	43	25	胎土が良い。
53	79	38	25	
54	81	44	25	
55	81	45	26	胎土が特に良い。
56	82	45	23	
57	84	48	22	底部が薄い。底径が最も大きい。
58	84	44	28	
59	85	45	29	底部が特に厚い。器高が最も高い。
60	83	43	26	焼成が甘くもろい。
61	81	40	27	

62	87	39	24	整形ぐせの段がない。口径が最も大きい。
63	77	35	24	粗雑な整形である。
64	82	40	25	
65	86	44	20	内面に降灰付着。器高が最も低い。
66	84	40	26	
67	82	38	24	内面に薄い釉がある。
68	79	44	26	胎土が良い。
69	85	43	27	
70	85	43	27	底部が外方にはみ出す。
71	82	41	25	底部が薄い。
72	83	42	25	

第5章 後 論

大府市域は古代から近世にいたるまで尾張国に属していた。

尾張は古代から製陶国として、全国的に有名であった。延喜5年(905)に編纂に着手し、延長5年(927)に完成した『延喜式』にも、踐祚大嘗祭に陶器を貢納する国として記載されている。平安時代に多量に生産された、この陶器には灰釉が施され、一般的に瓷器と称している。大府市内で知られている瓷器窯には、野々宮古窯(注1)がある。瓷器は三型式に分類し、編年している。野々宮古窯の製品は第二型式に比定され、年代として11世紀初頭に編年している。

大府市をはじめ知多半島北部では、第三型式の瓷器窯は確認されていない。

尾張国では瓷器に次いで行基焼を生産している。この行基焼も三型式に分類され、編年されている。

ハンヤ古窯の発掘の動機となった坂野好文氏が採集された行基焼は、第一型式に属するものである。この外、大府市内で第一型式の行基焼窯には、吉田第一号窯(注2)吉田第二号窯(注3)の2基が報告されている。この両窯はハンヤ古窯と近距離の丘陵上に築かれている。また、ハンヤ古窯と同一丘陵の南部には八巻古窯(注4)が存在する。

吉田第二号窯と八巻古窯の製品の中には、山茶碗、山皿にまじって鉢や壺が生産されている。この壺が坂野好文氏の採集された行基焼の壺に酷似している。ともに器面には灰釉が施され、前時代に盛行した瓷器的要素を残しており、行基焼第一型式に属するといえども、典

形的な第一型式より古式である。

また、吉田第一号窯・第二号窯とも、多量に瓦を焼成している。この製品は京都の安楽寿院等へ搬出され、12世紀初頭の安楽寿院建立に使用されている。

ハンヤ古窯出土の行基焼は、山茶碗と山皿の2種類のみで、すべて第二型式に比定されるもののみである。これを坂野氏が採集された行基焼とあわせ考えると、ハンヤ古窯付近には、かつて第一型式の行基焼窯が存在し、古窯群を形成していたと推察される。第一型式窯と第二型式窯とが近距離間に併存して、古窯群を形成する事例は大府東丘陵上にもみられる。その代表例として大府市北崎町に所在する北崎古窯群をあげることができる。北崎古窯群でも、行基焼第一型式窯よりも第二型式窯が多く築かれており、12世紀後半に比定される第二型式の行基焼の需要がこの地方で高まったことを暗示している。

尾張国における古代陶器から中世陶器へ移行する型式的過程は、瓷器の第三型式より行基焼の第一型式へ移るのが通例である。しかし、大府市をはじめ知多半島北部では、第三型式の瓷器がみられず、第二型式瓷器に次いで第一型式の行基焼が出現している。第二型式瓷器期と第一型式行基焼期の間には約1世紀のへだたりがある。尾張の製陶中心地域で第三型式瓷器が焼成されていたとき、知多半島北部では第二型式瓷器が焼かれていたと考えるよりも、第二型式瓷器の生産技術が遅れて伝播した結果であろう。換言すれば、知多半島北部は第二型式瓷器の生産における辺境の地であったと考えられる。

(加 藤)

注1. 加藤岩蔵『野々宮古窯発掘調査報告』大府市教育委員会 昭和50年

注2. 柴垣勇夫『吉田第一号窯発掘調査報告書』大府市教育委員会 昭和44年

注3. 柴垣勇夫『吉田第二号窯発掘調査報告書』大府市教育委員会 昭和50年

注4. 橋崎彰一「八巻古窯址群」(愛知県教育委員会刊『愛知県知多古窯址群』所収 昭和37年)

後 記

ハンヤ古窯を発掘調査した昭和52年8月は、とくに暑さが厳しかったように記憶していません。

このような悪条件のなかで、調査が順調に進行しましたのも、例言に記した方々の献身的な協力のたまものと思っています。なかでも、坂野好文氏は、調査期間中、84歳の高令にもかかわらず、連日参加して地主との交渉・遺物の整理など種々ご尽力くださったことは忘れることができません。

昭和53年4月、坂野氏は本書の刊行をまたずして、不帰の客となりました。

ここに、生前、大府市文化財保護委員として、埋蔵文化財をはじめ市の文化財保護にご尽力された功績をたたえとともに、本書を捧げて哀悼の意を表しご冥福をお祈りいたします。



(1) ハンヤ古窯の遠望



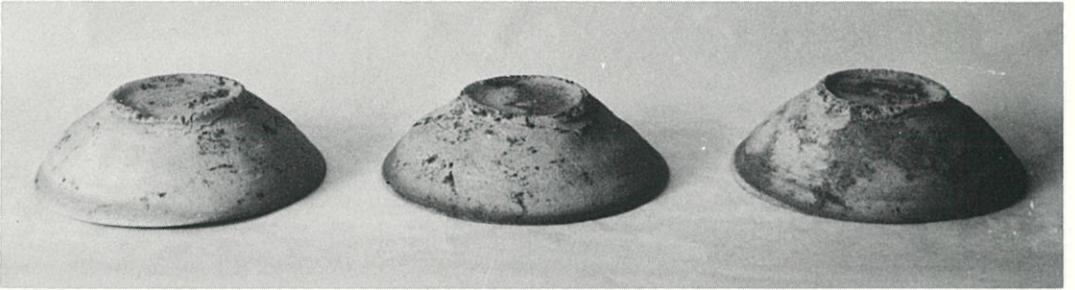
(2) ハンヤ古窯の全景 (焼成室よりの望見)



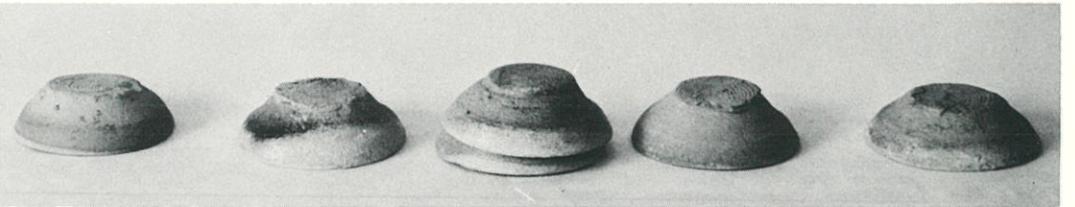
(1) ハンヤ古窯の焼成室北側の壁



(2) 分焰柱付近の遺物出土状況



(1) 山茶碗



(2) 山 皿

昭和54年11月20日 印刷

昭和54年11月30日 発行

ハンヤ古窯調査報告書

編集 大府市教育委員会
発行 大府市大府町雨兼31

印刷 愛知県郷土資料刊行会
名古屋市中区千代田五丁目7番32号

